

新

シリーズ1 進化する診療④ 脳梗塞

ひょうごの医療

医療



血管内治療について説明する坂井信幸脳神経外科部長
＝神戸市中央区港島南町2

国内の患者が推計約120万人に上る脳卒中。そのうち約7割を占めるのが脳梗塞だ。2009年3月の「ひょうごの医療」では、救命のみならず、まひや言語障害を残さずに治す可能性を開く新薬「t-PA」を紹介した。最近ではt-PAに加え、カテーテル(医療用の細い管)を使って薬剤で溶かしきれない血栓を直接取り除く「血管内治療」が広がり、さらに治療成績は向上している。

脳梗塞になると、血の塊(血栓)が動脈に詰まって酸素や栄養が届かなくなり、脳細胞が死滅してしまう。動脈硬化が原因の「血栓性脳梗塞」と、不整脈によって心臓で発生した血栓が流れてきて詰まる「心原性脳塞栓症」があり、後者は高齢化に伴って増加傾向にある。



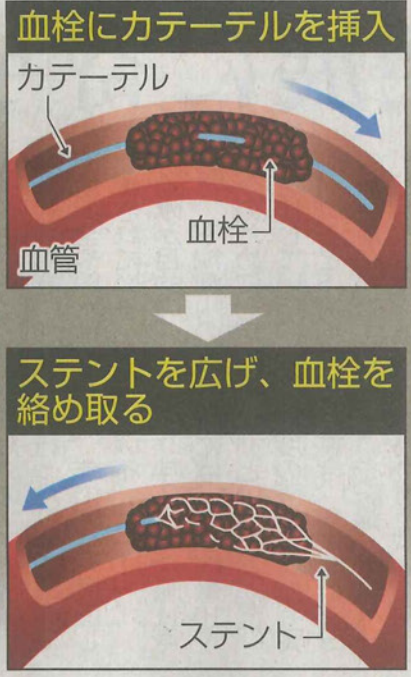
大西英之院長

治療で最初に使用を検討するのが、血栓を溶かす薬剤t-PAだ。全量のうちまず1割を静脈に入れ、残りを約1

血管内治療(カテーテル)

動脈の血栓、直接除去

血管内治療のイメージ



血栓にカテーテルを挿入
カテーテル
血栓
血管

ステントを広げ、血栓を絡め取る
ステント

脳卒中 脳の血管が詰まったり破れたりして神経が障害を受け、国内の死因では、がん、心臓病、肺炎に次いで4番目に多い。主に脳梗塞、脳出血、くも膜下出血の3種類がある。人口動態統計(2014年)によると、脳卒中による死者は11万4千人で、6割(6万6千人)は脳梗塞。言語や運動、感覚、記憶の障害が残るケースが多く、寝たきりになる人も。再発しやすい特徴もある。

血流戻す選択肢に広がり

4時間半以内の投与が保険適用されている。専門の病院で診療を受ける必要があるが、検査などに30分～1時間かかることを考えれば、発症から3時間半以内には病院に入らなければならぬ。発症時期が不明だったり、4時間半を超えたりした場合のt-PA投与も現在、臨床研究が行われている。研究に参加する大西脳神経外科病院(明石市)院長の大西英之さん(69)は「磁気共鳴画像装置(MRI)が使える病院で、血流が再開する可能性がある」と確認できた場合、投与可能になるだろう」とした上で「遅くてもいいというわけではない」とべきを刺す。脳出血の既往などがあれば

いて発表された。t-PAなど内科治療だけの人に比べ、血管内治療も合わせて実施した人の結果が良いことがはっきりと示された。血管内治療は、カテーテルを足の付け根から脳の血管に送り込んで行う。国内では10年、先端にワイヤを付けたカテーテルが出現。14年には、金属製の筒状の網を広げて絡め取る「ステント型」の血栓回収装置が実用化され、以前は取りきれなかった血栓にも対応できるようになった。今秋には、細い動脈にも入るような直径を2.5mmまで小さくしたステントの臨床試験(治験)が同病院で始まる。坂井さんによると昨年、t-PAの投与は全国で約1万件、血管内治療は約5千件かそれ以上とされる。同病院ではt-PA45件に対し、血管内治療は61件行い、再開通率は85%だった。ただ、治療は血管を傷つける危険性もあり、高い技術が必要だ。血管撮影装置などの機器や、医師や看護師の体制

t-PAはリスクが高いため使えず、内頸動脈など太い血管が詰まった場合は血栓を溶かしきれなくなる。そこで、血栓を直接除去する血管内治療がクローズアップされる。

「選択肢が広がり、脳梗塞治療の世界が一変した」。10年から先駆的にカテーテルによる血栓除去を実施している神戸市立医療センター中央市民病院の脳神経外科部長、坂井信幸さん(60)は言う。15年、血管内治療の有効性を示す海外の論文が5本相次

「選択肢が広がり、脳梗塞治療の世界が一変した」。10年から先駆的にカテーテルによる血栓除去を実施している神戸市立医療センター中央市民病院の脳神経外科部長、坂井信幸さん(60)は言う。15年、血管内治療の有効性を示す海外の論文が5本相次

正しい知識で迅速に対応

脳梗塞では、本人や身近な人のとっさの判断が重要になる。1年前に倒れた早瀬繁さん(75)は神戸市中央区に、妻のいつみさん(65)が素早く病院に運び、適切な治療を受けたため後遺症は全くない。いつみさんは「脳梗塞について知識があったのが本当に良かった」と語る。夕方5時ごろ、自宅マンションの地下で荷物を置いた繁さんは、マンホールのふたで足が滑った気がした。エレベーターの前で動けなくなったのを警備員が不審に思い、高層階の部屋まで支えて連れて行ってくれた。

患者の心構え

「特に持病もなかったのに倒れたので、すぐ脳梗塞だと思った」といつみさん。テレビや新聞を通じて症状や対処法の知識があり、治療薬t-PAも知っていた。繁さんはソファに横になり「大丈夫」と繰り返し見ているが、顔の左半分が見えるゆがみ、よだれが出てきた。いつみさんは繁さんとタクシーに乗り、自宅から数分の



「一晩待たずに良かった」。妻いつみさん(左)と振り返る早瀬繁さん(神戸市中央区港島中町6)

血管内治療ができる主な病院

- 神戸市立医療センター中央市民病院 (神戸市中央区)
- 吉田病院 (神戸市兵庫区)
- 大西脳神経外科病院(明石市)
- 兵庫医科大病院 (西宮市)
- 公立豊岡病院 (豊岡市)

神戸市立医療センター中央市民病院へ向かった。先に近くのクリニックを受診し、40分ほど費やしたため、到着は午後7時すぎになった。病院ではすぐにt-PAを投与され、「難しい場所が詰まっている」としてカテーテルによる血管内治療を受けた。その日のうちに手術は終了。繁さんは「妻が適切な対応をして、近くに専門の医師もいてくれて、本当に感謝しています」と笑顔を見せる。いま、繁さんは血液をサラサラにして血管が詰まるのを防ぐ薬と、血圧を下げる薬の2種類を服用する。脳梗塞は再発することが多いため、生活習慣にも気をを使う。大西脳神経外科病院の大西英之さん(69)は「脳梗塞でうちに運ばれた患者で、t-PAやカテーテルなどの治療を検討できるのは7%ほどしかない」とため息をつく。ほとんどの人が一晩様子を見て受診が遅れてしまうという。よく言われるのは「FAST」だ。顔(FACE)のゆがみ、腕(ARM)のしびれ、話(SPEECH)がうまくできないといった症状があれば、時間(TIME)を確認して急いで救急車を呼ぶ。前兆として一過性の症状が現れることもあり、見逃さないことが発症後の生活の質を左右する。(森 信弘)